

【第50号記念特集】**「食ビ歴史ミュージアムプロジェクト」の経過と成果****1. 小序**

2018（平成30）年より、学科75周年・学科校友会70周年記念事業の一環として、学科ならびに学科校友会の共同作業で「食ビ歴史ミュージアムプロジェクト」を進めてきた。以下では、プロジェクトの経過を述べたのち、その成果である展示パネルを掲載する。

2. 現状把握と計画検討

これまで周年祝典での学科校友会から学科への寄贈品は、学内行事で末永く活用されるのが望まれることから、学科校友会40周年では学科旗、50周年では応援旗、60周年では学科旗が贈られてきた。いずれも学部スポーツフェスタや学科球技大会、オープンキャンパス等で活用されてきた。機会ごとに活用されてきてはいるが、行事以外では保管される運命にあり、なかなか日の目を見ることが少なかった。このため、どのような寄贈品がよいかを検討する必要に迫られたのである。

そこで、学科の取り組み現況とニーズを分析すると、主に次の三点が明らかになった。

第一に、学科では2018年度から学生自治組織であるゼミ連絡委員会（通称ゼミ連）が「食品ビジネス学科FD委員会」として改組され、学科校友会との新たなコミュニケーションを踏まえた新展開が期待されてきたこと。第二に、1万人の学科卒業生を輩出し、OB・OGの多くが食品業界を中心に活躍しているにもかかわらず、残念ながら多くの受験生・学生が歴史の浅い学科との認識を持っていること。第三に、そのことから、むしろ長い歴史と実績を学科の「強み」と捉え、競合他大学や相次ぐ新設他大学との差別化に寄与できるものをつくれまいかということであった。

他方、学科校友会では、2015（平成27）年度より、事務局の作業効率化などを図るためデジタル化を推進（低返信率郵送物への対応としてメーリングリスト・Facebookの新設・HPの刷新等）するとともに、役員会を中心に学科広報・就職支援を継続していく組織運営、今後の受験生ニーズを見据えたスチューデントアシスタント：SA（現サポートスチューデント：SS）や国際化支援の検討等、他学科・他分会をリードする取り組みを模索してきた。学科75周年・学科校友会70周年記念式典では、“食ビプライド”を体現・再確認するべく、従来なかった300名（Wonderful NAKAMA300）の来場を目標に掲げ準備を続けていた。

3. 組織化と統合

以上から、次の三つの点を寄贈品に求められる条件として位置づけ、学科校友会から学科の科内会議（2018年3月20日）において提起した企画案が了承された。

条件の一つ目が「日の目を見る」寄贈品であること、二つ目が長い歴史と実績を踏まえた競合他大学・新設他大学との差別化や受験生・学生とのコミュニケーションが要請されていること、三つ目が学生ならびにOB・OGの“食ビプライド”の醸成と受験生へのPRが可能なものであることである。この三条件を満たすものとして「食ビ歴史ミュージアム（仮）」の寄贈が認められた。そして、長らく未活用であった本館10階の統計資料室側の廊下壁面（写真1）を展示場所として、農業経済学科から食品経済学科、食品ビジネス学科までの歴史と今後の教学実績を追加できる「写真付の歴史パネル」を製作することとなったのである。しかし、壁に長期間固定するには制約があることから、統計資料室の未使用扉及び使用中止のパイプスペース扉を活用することとした。

歴史パネルの目的と役割は、企画提案書によれば次のとおりである。

「食ビ歴史ミュージアムは、本学科が75年以上の歴史をもち、学科卒業生が約1万人おり、この分野の大学のフロントランナーとしてつねにイノベティブに前進し、食品ビジネスを中心に社会で活躍する多くのOB・OGを輩出していることなどが、廊下を歩くだけで分かる展示コーナーである。オープンキャンパスでの展示だけではなく、普段も在学生や食品企業等来訪者が歩くときに目にすることになるため、学科理念である『食で人を幸せにしたい』を再認識するとともに、食ビプライドの涵養等にも寄与することができる。」

プロジェクト委員会には、学科から片上敏喜専任講師（フードツーリズム論研究室）、清水友里専任講師（食品調理学研究室）が、学科校友会事務局から大石敦志教授（当時事務局長・食品産業論研究室）、高橋巖教授（現事務局長・地域経済論研究室）、佐藤奨平専任講師（事務局員・食品企業組織論研究室）がメンバーとして参画した。それから、ミーティングでは大学博物館・資料館での大学史の展示事例をもとに専門業者を交えて検討した。明るい白地を基調としたパネルとすることや、時代ごとの特色的な写真を掲載するだけではなく、瓦版のように当時の学生生活を伝えるエピソードを盛り込むことなどが決まった。

当初は、「草創期」、「成長発展期」などと画期区分を施しての叙述展開を考えていたが、



写真1 閑散としていた本館10階廊下

それについては一定の時間をかけて、カリキュラムならびに研究室の変遷を踏まえた学科組織経営史の分析が必要になること、パネルの紙幅に10枚との制限があることなどから、他日を期すこととなった。こうした事情から、今回は画期区分を行わず、農業経済学科から食品経済学科、食品ビジネス学科に至るまでの歴史を、順を追って年表化する作業を行うこととした。そのかわり、最初に年表全体を貫く視座として、学科の研究・教育イノベーション発展史を意識した解説文を執筆した。海外からの訪問研究者や留学生に向けて英訳も付けた。

4. 成果と課題

最終的に、学科教職員ならびに学科主任宮部和幸教授の最終確認を経て、2021（令和3）年7月に完成をみた。長い時間を要したのは、この間新型コロナウイルスの影響で作業が停滞したことなどもあるが、なによりも写真の収集や正確な史実の確認が必要であったからである。高橋巖先生の協力を得ながら、東京校舎時代からの本学科を知る伊豫軍記先生（協同組合研究室的食品流通研究室）、安村碩之先生（国民生活研究室的食生活経済論研究室）、下渡敏治先生（食品資源研究室的国際フードシステム研究室）、齋藤武至先生（経営学研究室的食品企業分析論研究室）、木島実先生（会計学研究室的食品産業広告論研究室的マーケティング研究室）には、特に農経・食経時代の出来事に関連して、底本によって年が違っているなどの不明点について適宜確認させていただいた。木島先生からは第1回食品ビジネス特別講義（日清食品株式会社）当時の写真と同社社内報を、大石先生には食経時代（湘南校舎移転後）の経済調査実習の写真を、宮部和幸教授（農村資源開発論研究室）にはフィールドリサーチの写真を、川手督也教授（産業社会学研究室）には海外フードシステム現地研修の写真を、高橋巖教授（地域経済論研究室）には食ビに改称後立ち上げられた食料生産実習（初年度）の写真を、谷米温子准教授（フードコーディネート研究室）には同じく調理学実習（初年度）とフードコーディネート実習の写真を、それぞれご提供いただいた。また、学科校友会藤井正気副会長からも、当時の事情等についてアドバイスをいただいた。完成パネルの設置に際しては、学科事務室の埴和泉実習助手、井上由紀子元臨時職員の温かいご助力を賜った。感謝申し上げます。

編集に携わる筆者としては経営史学の手法をもとに、底本である学科史・学部史等を用いた対比分析を試みつつ、企業ミュージアムやアーカイブズ学からも参考にすべく、企業史料協議会ビジネスアーキビスト研修の基礎コースならびに応用コースの全課程に参加する機会を得た（2020年12月課程修了）。近年の企業ミュージアムでは、経営史学者が監修・参画するのみならず、企業のコーポレートコミュニケーション部やCSR推進グループ

等の担当者がビジネスアーキビストとしての技法を修得し、新製品・新サービス開発や営業・マーケティングに応用するほか、過去の製品現物・プロモーション資料等の展示の際に、専用の照明を用いて落ち着いた空間を演出したり、通路等の見学コースで映像コンテンツをスクリーン上映したりするなどを通して、ステークホルダーに対して組織の持続可能な価値を発信している。近年の大学博物館・資料館でも、これと同様の取り組みが行われてきている。

本プロジェクトの成果としては、第一段階として歴史パネルの完成をみた。上記のような照明やスクリーンを用いた演出等については、今後の第二段階以降に取り組んでいく課題となる。なお歴史パネルはいつでも取り外し可能なものであるため、追加補充や特別展示も可能である(写真2)。これからは、在学生や卒業生・食品企業等の来訪者向けとしてだけでなく、オープンキャンパスや新入生研修会での見学コースとしても活用されることになるであろう。「現在と過去・未来の対話」(Carr, E.H.)を続けながら、本学科のさらなる躍進と繁栄に向けて努力してゆきたい。

参考文献

- E.H.カー (1962)『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書。
- いもづる会40周年記念事業実行委員会編 (1988)『いもづる会40周年記念誌』日本大学農獣医学部食品経済学科校友会。
- いもづる会50周年記念事業実行委員会編 (1998)『学縁-いもづる会50周年記念誌-』日本大学生物資源科学部食品経済学科校友会。
- 学科75周年・学科校友会70周年記念事業実行委員会編 (2018)『日本大学農経・食経・食ビ学科創設75周年・いもづる会創立70周年記念誌』日本大学生物資源科学部食品ビジネス学科校友会。
- 日本大学生物資源科学部創設50周年記念誌編集委員会編 (2002)『日本大学生物資源科学部創設50周年記念誌』日本大学生物資源科学部。
- 日本大学生物資源科学部記念誌編集委員会編 (2011)『日本大学生物資源科学部創設60周年記念誌』日本大学生物資源科学部。
- 日本大学生物資源科学部校友会記念誌編集委員会編 (2019)『日本大学生物資源科学部校友会創立70周年記念誌』日本大学生物資源科学部校友会。

(文責：佐藤奨平)



写真2 寄贈・設置された歴史パネル

食品ビジネス学科の歴史

本学科(農業経済学科・食品経済学科・食品ビジネス学科)は、2021(令和3)年で78年目を迎え、食品ビジネス分野を中心に国内外で活躍する10,000名超のプロフェッショナル人材を輩出してきました。この分野の研究教育機関としては、最も長い歴史を有しています。二度の学科名称変更は、先見性のある本学科のイノベティブな歩みを示しています。

農業経済学科時代 1943(昭和18)年～1968(昭和43)年

25年間続いた農経時代は、戦中戦後の物資不足・食糧難を乗り越えつつ、農業界の指導的人材の育成を目的に、農業の経営経済に関する理論的・実践的な研究教育に主眼を置いていました。フィールド重視の実証研究や少人数のゼミナール重点主義は、当時から続く本学科の伝統になりました。本学部最初の大学院として農業経済学専攻も設置されました。また、戦後農業の発展に寄与した農業協同組合の経営リーダー育成も見据えながら、農業経済学専修と農業協同組合専修の2コース制を設けたことには、日大農経の大きな独自性があったといえます。

食品経済学科時代 1968(昭和43)年～2010(平成22)年

42年間続いた食経時代は、戦後の高度経済成長期に始まりました。折しも1964(昭和39)年の東京オリンピック開催直後のことであり、当時は多くの加工食品や冷凍食品が開発され、外食産業が勃興するなど、社会経済や生活様式が急激に変化した時期でした。従来の農業生産面中心の農業経済学の学問体系では、新たな時代に対応しきれないと考え、日本では初めて、食品の生産から加工・流通・販売・消費までを視野に入れた「食品経済学」の学問体系・研究教育体制の確立を目指し、食品経済学科に名称変更しました。農経から食経に名称変更の際には、一部から意見もありましたが、歴史を振り返ると、高い先見性があったと評価されています。これにより、全国各地から食品企業の後継者も入学するようになりました。学科内に結成された日本大学食品産業研究会は「フードシステム学」を構想することとなり、産官学共同の学術団体である日本フードシステム学会の基礎を築きました。また、学科校友会の支援で開始した就職相談会は本学科の誇る強い就職力の基盤となり、現在の「学部就職セミナー」のモデルになりました。さらに、トップ経営者による特別講義は、食品ビジネスの最先端に触れることのできる機会として、本学科の目玉科目となりました。2002(平成14)年には「さよなら三茶フェスティバル」を開催し、東京校舎(世田谷区下馬)から湘南校舎(藤沢市亀井野)への全面移転を行うことで、教育研究環境の充実が図られました。

食品ビジネス学科 2010(平成22)年～現在

時代が大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済モデルから、サステナブルな暮らし創造を重視するようになりました。食の潮流も大きく変化し、簡便化志向の進展とともに、安全・安心を前提に、おいしく食べて健康的な食生活を創造するフードシステムのあり方が問われるようになりました。この環境変化と多様化するニーズにいち早く対応し、農経・食経時代より続く社会科学系の研究教育体制を基礎として、新たに食品科学系の研究室の新設と関係科目の導入により、学科名称を「食品ビジネス学科」に変更しました。「食」で人を幸せにしたい」との理念のもと、「食料資源・環境」「食品産業」「食文化・食品科学」の三本柱による最先端の研究教育体制を敷き、「食をプロデュースする人材」の輩出を目指しています。2018(平成31)年には学科75周年・学科校友会70周年、2020(令和2)年には「食品ビジネス学科」と名称変更して10周年を迎えました。

The History of the Department of Food Business

-A department with an 80-year legacy that has been working toward its mission of "Making people happy through 'food'" -

In 2021, our Department (formerly known as the Department of Agricultural Economics, the Department of Food Economics, and now the Department of Food Business) celebrated its 78th anniversary and has produced over 10,000 professionals from Japan and overseas, primarily in the field of food-based business. We have the longest history in this field of any research or educational institution. The Department's two name changes represent its foresight and the innovative direction it has adopted.

The Department of Agricultural Economics Era: 1943–1968

The Agricultural Economics era, which lasted for 25 years, focused on theoretical and practical research as well as education about the economics of agriculture management, with the aim of cultivating leadership professionals in the agricultural industry, while at the same time overcoming the postwar shortage of goods and other issues surrounding food. Field-focused empirical research and a system of small seminar groups have been part of the Department's tradition since that time. The Department of Agricultural Economics was also the first graduate school established in our faculty. In addition, the establishment of a two-course system, which offers specialties in both Agricultural Economics and Agricultural Cooperatives, with an eye to fostering the management leaders of agricultural cooperatives that contributed to the development of agriculture after World War II, could be considered as the major distinguishing feature of Agricultural Economics at Nihon University.

The Department of Food Economics Era: 1968–2010

The era of the Department of Food Economics, which lasted for 42 years, began during the period of rapid economic growth following World War II. Coming just after the holding of the Tokyo Olympics in 1964, at that time, many processed foods and frozen foods were developed, the food service industry was on the rise, and there were many changes in socio-economics and people's lifestyles. We believed that the conventional academic system of agricultural economics, which was centered on agricultural production, could not respond to this new era. Therefore, for the first time in Japan, we changed the Department's name to the Department of Food Economics with the aim of establishing an academic system and a system for research and education about food economics that covers everything from production to processing, distribution, sales, and consumption. When we changed the name from the Department of Agricultural Economics to the Department of Food Economics, opinions were received from some individuals, however, looking back on our history, we are highly praised for having a great degree of foresight. As a result, the heirs of food companies from all around the country began enrolling in our university. The Nihon University's Research Association of Food Industry, which was set up in the department of food economics, devised the concept of "Food System Science," which has laid the foundation for the Food System Research Association of Japan, an academic body that involves collaboration between the industry, government, and academia. In addition, the Employment Advisory Council, which was initiated with the support of the Department's Alumni Association, has served as the foundation for the proud and strong job-hunting tradition of this department, and has become a model for the current "Faculty Employment Seminars." In addition, special lectures by top-flight managers have become the jewel in the crown of the Department, offering an opportunity to directly engage with the cutting edge of the food business. In 2002, we hosted the Sayonara Sancha Festival, after fully relocating from our Tokyo Campus (Shimoma, Setagaya Ward) to the Shonan Campus (Kameino, Fujisawa City) in order to enhance our research and education environment.

The Department of Food Business : 2010–Present

In this era, we have come to emphasize the development of sustainable lifestyles from an economic model of mass production, mass consumption, and mass disposal. Food trends have also changed dramatically, and along with the progression of the movement toward simplification, food systems that create delicious and healthy diets have begun to be questioned in terms of the values of safety and peace of mind. In order to quickly respond to the said changing environment and diversifying needs while also being based on a system of social science research and education that has continued since the era of Agricultural Economics and Food Economics, we changed the name of the Department to the Department of Food Business with the introduction of new food science laboratories and relevant subjects. In line with our philosophy of "Wanting to make people happy through food," we have established a cutting-edge research and education system based on the three pillars of "Food Resources and the Environment," "the Food Industry," and "Food Culture and Food Science," with the objective of shaping "professionals who produce food." In 2018, we celebrated the 75th anniversary of our Department and the 70th anniversary of the Alumni Association, and 2020 marked the 10th anniversary of changing our name to the Department of Food Business.

(Produced by: The Committee for the Execution of Events to Commemorate the 75th Anniversary of the Department and the 70th anniversary of the Alumni Association
Donation: Department Alumni Association)

農業経済学科時代

1943(昭和18)年～1968(昭和43)年

- 1889(明治22)年 日本法律学校創立(学祖・山田顕義,初代校長・金子堅太郎)
- 1903(明治36)年 校名を「日本大学」と改称(初代学長・松岡康毅)
- 1907(明治40)年 東京獣医学校創立(東京府豊多摩郡渋谷村)
- 1920(大正9)年 大学令により「日本大学」設立認可
- 1925(大正14)年 東京獣医学校移転(東京府荏原郡駒沢村大字下馬)
-
- 1941(昭和16)年 日本大学が農学部増設を計画
- 1943(昭和18)年 農学部を神奈川県藤沢市に設置
農業経済学科,農学科(農学,寒地農学,熱帯農学,園芸学・薬草学,畜産学)を設置
- 1945(昭和20)年 日本大学学徒隊結成(5月22日)
終戦(8月15日)
日本大学授業再開(8月20日)



日本大学学徒隊出陣式



門柱



創設当初の農学部本館



ゼミナールの風景(1955・昭和30年)



農村調査実習先の集計作業



第10・11期 OB合同コンパ 於・三軒茶屋・富士(1955・昭和30年)

いもづる会余話

「農業経済学科1期生が昭和23年3月卒業と同時に発足した校友会は当初は会名がなかった。

4年経った27年秋、在学生を含め応募し、校友会の検討となったが、仲々名称が決まらず、たまたま私が『いもづる会』ではどうか、と提案した処、異口同音に全員の賛同を得て、決定したと記憶して居る。

食糧不足の当時甘藷は生命綱で、芋蔓の役割は恰も、校友相互の強いつながりに、最も適合して居り、その様なネーミングが皆の共感を呼んだものと思われる。

在学時をふり返って見て、戦中・戦後の荒波をぐぐり抜け、ようやく予科3年を修了、農学部農業経済学科に進学したのは、昭和22年の春であった。

農経に入った理由は、元来理系が苦手で、学部の中で唯一の文系であった事や、予科入学当時の夢であった熱帯農学科が敗戦により消滅した事などであり、内心では、農村調査の折、食物に有りつけることに、大きな魅力を感じて居たことも、誠にさもしい魂胆乍ら当時としては、大きな魅力であった。」

(第3期・三木敏夫・元雪印パーラー株式会社)

- 1948(昭和23)年 農学部農業経済学科(旧制)第1期卒業(12名)
卒業生が校友会を結成(当初は正式名称を定めず)
- 1949(昭和24)年 新学制(学校教育法)・農業経済学科,農学科,畜産学科,林学科,
水産学科(予科制度廃止),東京獣医畜産大学設置(新学制)
- 1951(昭和26)年 大学院修士課程設置認可(新学制)
大学院農学研究科農業経済学専攻
学校法人日本大学と学校法人東京獣医畜産大学の合併認可
- 1952(昭和27)年 日本大学農獣医学部(名称変更・学科増設認可)
農業経済学科,農学科,獣医学科,畜産学科,林学科,水産学科
学科校友会の名称公募(「桜経会」等が集まる)
三木敏夫(第3期)が「いもづる会」と提案し,出席者全員賛同
- 1955(昭和30)年 教育・研究の拠点を藤沢校舎から東京校舎に移転
- 1960(昭和35)年 農業経済学専修・農業協同組合専修の2コース制とする
- 1961(昭和36)年 「拓植専修コース」が一時附設(後の旧拓植学科)
- 1964(昭和39)年 東京オリンピック開催



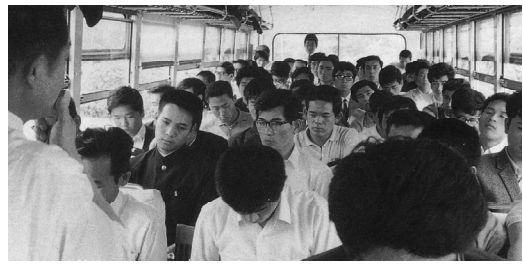
他大学招待シンポジウム(1962・昭和37年)



両国講堂での卒業式(1965・昭和40年)



新入生歓迎球技大会(1965・昭和40年)



新入生歓迎バスハイク(1966・昭和41年)



新入生歓迎会(1966・昭和41年)



三茶祭開会式(1966・昭和41年)

食品経済学科時代

1968(昭和43)年~2010(平成22)年

1967(昭和42)年 農業経済学科を「食品経済学科」に名称変更(12月)

1968(昭和43)年 大学闘争により学部校舎封鎖

1970(昭和45)年~1971(昭和46)年 以降1年次学生は藤沢校舎で授業となる(2年次から東京校舎)

1971(昭和46)年 学科卒業生1,000名を超える(3月)

大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程設置

食品経済学科を食品経済学・農業経済学の2コース制とする



バリケード封鎖スト突入(1968・昭和43年)



校外授業を報じる新聞(1969・昭和44年)

思い出

「当時は全国的な大学紛争期、農獣医学部も1年間の休業を余儀無くされ、代々木区民会館での学科討議、5月連休の藤沢校舎での集中講義、そして下馬校舎での授業再開。私は、いつも教室では仲間の席で15~6名の仲間とたむろし、勉強の他に早弁とマージャンの面つ集めを熱心に。一方、学生として前・後期試験の想定問題の作成、三茶祭、3年次の食品経済調査でのインタビュー失敗、3年生を駆使した卒論作成など学生時代の思い出は尽きません。……

当時から座学とともにフィールドワーク調査を重視する学科であり、流動する社会の実学を学ぶ事ができました。考えてみれば日本で唯一の学科名『食品経済学科』の学生であると自負し、関連の色々なものに興味を持って学ぶ『自由闊達な雰囲気』の学科運営』の中での学生生活を送った事が、今になって糧になっております。この学生時代の経験が無かったら今の私はありません。

利害関係の全く無い学友との出会い。絶えず相談相手として、また就職開拓や進路指導に苦勞された恩師との巡り会いは、私にとって『人生最大の宝物』と感謝しております。」

(第25期・鈴木忠敏・元酪農学園大学教授)



畳座敷での農業法の試験
(1969・昭和44年)



農場実習



食経1期生の農村調査



読書に耽け論壇風発の日々

- 1974(昭和49)年 カリキュラム改正
- 1975(昭和50)年 学科初の海外研修旅行(3月)・学科校友会機関誌『食品と経済』を学術誌(創刊号)として発展(4月)・第1回学科親睦球技大会(10月)
- 1979(昭和54)年 学科卒業生3,000名を超える(3月)
- 1983(昭和58)年 『食品と経済』第10号を数え、『食品経済研究』に改称(12月)
- 1985(昭和60)年 カリキュラム改正
- 1986(昭和61)年 学科内に「日本大学食品産業研究会」を結成(初夏)
(農林中央金庫調査部が研究費交付により援助)
- 1988(昭和63)年 学科卒業生5,000名を超える(3月)
- 1989(平成元)年 学科編『現代の食品産業』(農林統計協会)刊行(4月)
天皇后両陛下をお迎えし、日本大学創立100周年記念式典(10月)
- 1990(平成2)年 食品経済学科・いもづる会共催「第1回就職セミナー」開催(6月)



校友会会報から食品経済研究へと発展



統計資料室で調べる学生



年に一度の三茶祭



楽しいゼミの一コマ



卒業論文発表会(1983・昭和58年)



卒業式での教職員(1987・昭和62年)

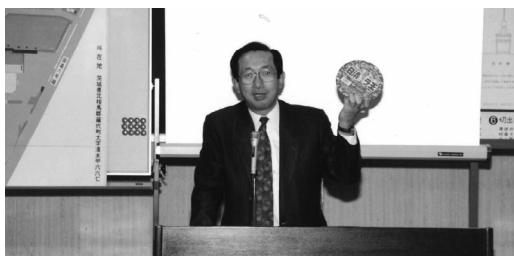


「強い就職力」の源、就職セミナー(1994・平成6年)

「創立から50年にもなると、上は70歳代から若手はその孫にも相当するような20歳代、老若男女、幅広い職業などの会員が時間の経つのも忘れて交流の輪が広がっている。……なお、いもづる会が食品経済学科と共催で、平成元年よりはじめた就職セミナーは、後に学科主催・いもづる会協賛となり、さらに平成10年より学部行事へと発展的に拡大実施されることとなった。」

(第22期・安村碩之・元本学科教授)

- 1992(平成4)年 カリキュラム改正
第1回特別講義(日清食品株式会社・安藤宏基社長)
- 1993(平成5)年 第2回特別講義(三菱食品株式会社・廣田正社長)
- 1994(平成6)年 第3回特別講義(株式会社モスフードサービス・桜田慧会長)
- 1995(平成7)年 湘南校舎正門完成(8月),「三茶祭」幕を閉じる(10月)
第4回特別講義(東洋水産株式会社・有本明最高顧問)
- 1996(平成8)年 日本大学農獣医学部を改組転換し,日本大学生物資源科学部を設置
いもづる会50周年記念式典・祝賀会(於ダイヤモンドホテル・半蔵門)
第5回特別講義(国際流通グループ・ヤオハン・和田一夫代表)
- 1997(平成9)年 第6回特別講義(株式会社すかいらーく・横川端取締役(グループ代表理事))
- 1998(平成10)年 六会駅を「六会日大前駅」と改称
第7回特別講義(キッコーマン株式会社・吉田節夫代表取締役専務)
- 1999(平成11)年 第8回特別講義(雪印乳業株式会社・小塚善文国際部副部长)



トップ経営者による「食品ビジネス特別講義」はここから始まった(1992・平成4年)

- 2000(平成12)年 大学院農学研究科を改組し、生物資源科学研究科を設置
生物資源経済学専攻、生物資源生産科学専攻、生物資源利用科学専攻、
応用生命科学専攻、生物環境科学専攻
第9回特別講義(日本製粉株式会社・高橋章夫常任顧問)
- 2001(平成13)年 学科卒業生7,000名を超える(3月)
「さよなら三茶フェスティバル」(東京校舎)を開催
第10回特別講義(サミット株式会社・荒井伸也(安土敏)代表取締役社長)



平成8年度 食品経済学科新入生研修会 (1996年4月27日) 贈 いもづる会(食品経済学科校友会)



東京校舎時代(食経)の統計資料室



東京校舎時代(食経)のゼミナル風景



いもづる会の支援行事「食品産業の現状とOBの戦場」



さよなら三茶フェスティバル(2001・平成13年)

- 2002(平成14)年 食品経済学科,国際地域開発学科が湘南校舎へ移転
第11回特別講義(ワタミフードサービス株式会社・渡邊美樹代表取締役)
- 2003(平成15)年 第12回特別講義(株式会社ニチレイ・浦野光人社長)
- 2004(平成16)年 カリキュラム改正,「食料資源環境コース」と「食品産業コース」の2コース制を導入(4月)
第13回特別講義(コープかながわ・小林勉理事長)
- 2005(平成17)年 第14回特別講義(アサヒビール株式会社・瀬戸雄三相談役(元社長・会長))
- 2006(平成18)年 「海外フードシステム現地研修」・「フードシステムインターンシップ」の開講
第15回特別講義(日本ケンタッキー・フライド・チキン株式会社・渡辺正夫代表取締役社長)
- 2007(平成19)年 学科卒業生8,000名を超える(3月)
第16回特別講義(明治乳業株式会社・浅野茂太郎代表取締役社長)
- 2008(平成20)年 第17回特別講義(株式会社ヤオコー・川野幸夫代表取締役会長)
- 2009(平成21)年 第18回特別講義(株式会社サイゼリヤ・正垣泰彦代表取締役会長)



湘南キャンパスの本館10・11・12階に引っ越し



食品のヒット要因を探るゼミナール



食品メーカー工場での経済調査実習



年度末の学科研修会・懇親会

食 品 ビ ジ ネ ス 学 科

2010 (平成22) 年～現在

- 2010 (平成22) 年 食品経済学科を食品ビジネス学科に名称変更,新たに食品科学系の科目を導入し,「食料資源・環境」・「食品産業」・「食文化・食品科学」の三本柱にカリキュラムを改正
第19回特別講義(カルビー株式会社・伊藤秀二代表取締役社長兼COO)
- 2011 (平成23) 年 東日本大震災・東京電力原発事故
カリキュラム改正2年目にあたり,新科目「調理学実習」・「食料生産実習」・「食物学実験」等を開講
第20回特別講義(株式会社ライフコーポレーション・清水信次代表取締役会長兼CEO)
- 2012 (平成24) 年 調理実習室(7号館4階)を開設
第21回特別講義(株式会社グリーンハウス・田沼千秋代表取締役社長)
- 2013 (平成25) 年 第22回特別講義(カゴメ株式会社・西秀訓代表取締役社長)
- 2014 (平成26) 年 学科卒業生9,000名を超える(3月)
「食品ビジネス学科中長期計画」策定,以降,学科運営を計画的に推進
第23回特別講義(バルシステム生活協同組合連合会・山本伸司理事長)
- 2015 (平成27) 年 本年度から学科校友会行事において研究室活動報告会を開催
第24回特別講義(ハウス食品株式会社・浦上博史代表取締役社長 *次パネル写真)
- 2016 (平成28) 年 第25回特別講義(全日本食品株式会社・平野実代表取締役社長(本学科38期卒))
学科編著『人を幸せにする食品ビジネス学入門』(オーム社)刊行(10月)
- 2017 (平成29) 年 プレゼンテーションルーム(本館10階)をICT対応型としてリノベーション開設
第26回特別講義(株式会社ねぎしフードサービス・根岸榮治代表取締役社長)
- 2018 (平成30) 年 学科75周年・学科校友会70周年記念式典・祝賀会(於本学部)
第27回特別講義(株式会社伊藤園・本庄八郎代表取締役会長)
- 2019 (平成31・令和元) 年 日本大学創立130周年
第28回特別講義(横浜丸中ホールディングス株式会社・原田篤代表取締役社長)
- 2020 (令和 2) 年 学科卒業生10,000名を超える(3月)
「新・中長期基本計画」策定,食品ビジネス学科に名称変更10年・学科記念ロゴ制定
新型コロナウイルス感染症の影響等で,オンライン及びオンデマンド授業を導入
- 2021 (令和 3) 年 東京オリンピック・パラリンピック開催
- 2022 (令和 4) 年 学術誌『食品経済研究』第50号(3月)
- 2023 (令和 5) 年 学科80周年・学科校友会75周年



被害を受けた統計資料室は全面的に対策工事を行い,翌年,リニューアル開室された。新たな統計資料室(通称・食の専門図書室)では,食品ビジネス関連の図書・資料・統計を中心に和・洋書約4万冊を所蔵しており,レポートや卒業論文の作成に大いに役立っている。



フィールドリサーチ



調理学実習



食料生産実習



海外フードシステム現地研修



フードコーディネート実習



食品ビジネスインターンシップ



食品ビジネス特別講義



食ビ初年度の学科教職員



学科75周年・学科校友会70周年記念式典・祝賀会

